

■ 書 評



「社会精神医学」

日本社会精神医学会 編集
480 頁, 定価 11,550 円
医学書院 2009 年 3 月

日本社会精神医学会が編集した、待望の逸品である。学会が総力をあげて綿密に計画立案し、見事に社会精神医学の『教科書』として結実した傑作である。例えば懸田克躬先生（元・順天堂大学学長）と加藤正明先生（元・東京医科大学教授）の共編による「社会精神医学」が、1970年に同じく医学書院から刊行されてから約40年である。この年には筆者はまだ高校生であったから、相当な年月、余分な空隙があったと言えよう、なぜならこの40年間に、世界はまるで変質してしまったので、「ヒトの幸福とは何か」について、皆で真剣に考え直すべき時期を既にとっくに過ぎているからである。しかし、ここに来て足元から再考し、底辺から再構築していかねばならぬのである。

社会精神医学は精神医学の中核的位置にある。総ての生物学的な精神医学は、人々の社会生活の向上や疾病の予防や、さらには人間理解全体の手段ではあるが、つまるところその叡智は「社会精

神医学」や「社会」に還元されるべき性質の学問領域である。

本書は日本社会精神医学会がかようなニーズに応えるべく、全力を挙げて醸成された。本書の企画は既に2004年の秋に、当時の理事長であられた中根允文先生（前・長崎大学教授）のご発案によって、常任理事会のなかに編集委員会が立ち上げられてスタートしたと聞く。実に企画段階から3年余をかけて熟成されたことになる。著名な執筆陣が肩を並べて登場する。その陣容は「精神医学」に拘泥することなく、広く法学、経済学、心理学、建築学、社会福祉学、社会学、宗教学、教育学云々に及び、肉厚なものとなっている。現代の世界が直面している大きな課題である「国際性と多様性」が語られている。第1章から終章まで、最新のテーマが余すところなく論じられ、教科書的にも充分なボリュームである。「ジェンダー」、「メディア・インターネットの影響」、「ひきこもり」、「ニート」といった今現代の用語が小目次として、次々と軒を連ねる。

「ヒトの幸福とは何か」といったことを根本的に足元から見つめ直す時期に来ている。現代社会は、他人や他の集団との境界が曖昧になったり、反対に必要以上に一線を画して排他的かつ孤立的ともなってしまう。願わくば、本書が改訂増補を繰り返しながらさらに発展し、この社会が健康なものとなることを祈っている。

（堀口 淳）